

タブ 1

本文

「葵の上の失せのほどのこともあはれなり。御わざの夜、父大臣の間に迷ひたまへるなど、ことわりにあはれなり。剣める御衣を奉り換ふとて、①(我先立たましかば、深く染めたまはまし)、などおぼして、

かぎりあれば薄墨衣あさけれど涙ぞ袖をふちとなしける

と詠みたまふところ。(中略)

また、御忌み果てて、君も出でたまひ、日ごろさぶらひつる女房ども、おのおのあからさまに散るとて、おのがじ別れ惜しむところ、いたくあはれなり。また、書きたまへる御手習ひども、大臣見て、泣きたまひなどするも、すべてあはれなる巻なり。

須磨の別れのほどのことも。葵の上の古里にまかり申しにおはして、

[A]鳥辺山燃えし煙もまがふやと海人の塩焼くうらみにぞ行く

とあるところ。また、鏡台に御鬢搔きたまふとて見たまへば、②(いと面痩せたる影の、我ながら清らなるもあはれにおぼえて)、「この影のやうにや痩せはべる」とて、

身はかくてさすらへぬとも君があたりさらぬ鏡の影は離れじ

と聞こえたまへば、紫の上、涙を一目浮けて、見おこせて、

別るとも影【4】とまるものならば鏡を見てもなぐさみなまし

とあるところ。また、賀茂の下御社のほどにて、神にまかり申したまふとて、

[B]憂き世をば今ぞ別るとどまらむ名をばただすの神にまかせて

とあるところ。また、出でたまふ暁、紫の上、

惜しからぬ命に換へて目の前の別れをしばしとどめてしかな

とのたまへるこそ、③(いと人わろけれ)。④(何の人数なるまじき花散里)だに、

月影の宿れる袖はせばくともとめても見ばや飽かぬ光を

とこそ聞こえたまふめれ。

注釈は無し

(「無名草子」による。ただし本文の一部を省略した)

タブ 2

問題

問一 傍線部①の意味内容として、最も適切なものを次の中から選べ

- 1 私が先に立ち上がったので、彼女は頬を深くお染めになったのだろう
- 2 私が先に立出しなければならぬならば、濃い色の服を着たいものだ
- 3 私が先に退出したがったので、大臣は怒りで顔を紅潮なされたのだろう
- 4 私が先に死んでいたら、彼女は喪服の色を濃くお染めになったであろう

問二 和歌[A]で使用されている表現技法の組み合わせとして、最も適切なもの

- 1 縁語と掛詞 2 係り結びと倒置 3 掛詞と枕詞 4 序詞と倒置

問三 傍線部②の意味内容として、最も適切なもの

- 1 面やつれしながらも美しい自分の顔貌を見てしみじみとした気分になって
- 2 痩せた外見ではあるが、美しく思える人物のことがしみじみと思い出されて
- 3 美しいはずの自分の姿が、鏡像ではやつれているので、惨めな気分になって
- 4 外見上は痩せてしまった我が身ながら、その内面は興味があると感じられて

問四 空欄[]に入る言葉として、最も適切なもの

- 1 だに 2 ぞ 3 こそ 4 さえ

問五 和歌[B]の説明として、最も適切なもの

- 1 はかない現世に別れを告げようとしているが、神の名に託すことで自分の名声を後世に残す意志を表明している
- 2 自分の評価は都を離れた後にいずれ明らかになるだろうという思いと、下鴨神社の糺の神の名とを掛けている
- 3 つらいこの世から離れるか留まるかの判断を名のある神に委ねて、苦しみから逃れたいという思いを表している
- 4 都を去ることを考える中で、残される人々の名前を思い出し、下鴨神社の神に一切を任せることを希望している

問六 傍線部③の説明として、最も適切なもの

- 1 感情的になってでも光源氏と離れまいとする紫の上を理解しない者は情趣がない
- 2 別れ際に光源氏に対して、直接的で感情的な和歌を詠んだ紫の上は好ましくない
- 3 情愛の強さを自分の命と比較して表明する妻の意をくまない光源氏は冷酷である
- 4 離別の悲しみの大きさを自分の命に喩えるような和歌には品性が備わっていない

問七 傍線部④の人物を話題に出した理由として、最も適切なもの

- 1 紫の上の歌に対する評価を述べるに際し比較対象として好都合だったから
- 2 様々な女性登場人物がいるのに紫の上だけを取り上げるのは不公平だから
- 3 源氏物語に登場する女性たちの中で、筆者が一番評価している人物だから
- 4 愛情を読み込んだ和歌の話題は例をたくさん挙げた方が分かりやすいから

問八 本文の内容と合致しないもの

- 1 離別の場で人々が見せる情景からはしみじみとした感動が伝わってくる
- 2 秘めた哀しみを和歌に託して間接的に伝えようとした紫の上は思慮深い
- 3 別離のたびに光源氏が見せる立ち居振る舞いの中には情趣が垣間見える
- 4 取るに足らない人物と思われる花散里でさえも身の程をわきまえている

タブ 3

【解答一覧】問一 4 問二 1 問三 1 問四 1 問五 2 問六 2 問七 1 問八 2

【解説】

問一 反実仮想(文法)

正解: 4

これは「確実に決める」べき問題。

「ましかば……まし」の形を見たら、即座に反実仮想と反応！

「もしAだったならば、Bだろうに(実際は違う)」という構文。

文脈: 亡くなった葵の上に対して、光源氏が喪服(薄墨の衣)を着替えている場面。

直訳: もし私が先立っていたならば、(彼女は私のために喪服を)深くお染めになっただろうに。

選択肢4「私が先に死んでいたら～お染めになったであろう」が文法的にも文脈的にも完璧

問二 和歌の修辞法(知識)

正解: 1

和歌の修辞法は私大古文の頻出事項！

歌: 海人の塩焼くうらみにぞ行く

掛詞: 「うらみ」が、「浦見(＝浦の方を見る)」と「恨み(＝嘆き悲しむ)」の掛詞になっている。

縁語: 「海人(あま)」「塩焼く」「浦(うら)」は海に関連する縁語のグループ。

よって「縁語と掛詞」の組み合わせである1が正解。

基本的な修辞法は、パズル感覚で見抜けるようにしておこう！

問三 単語の意味と文脈把握

正解: 1

重要単語の知識と文脈の結合。

影: ここでは「鏡に映った姿」。

面痩せたる: 痩せてやつれている。

清らなる: (最高級の)美しさ。

あはれ: しみじみとした感動、趣。

光源氏が鏡を見て、「やつれているけれど、我ながら美しいなあ」と、その悲劇的な状況と自身の美しさに陶醉している場面。

選択肢1が最も過不足なく説明している。

選択肢3の「惨めな気分」や、選択肢4の「内面は興味がある」は、本文の「清らなる(＝見た目の美しさ)」からズレている。

問四 副助詞「だに」(文法)

正解: 1

空欄補充は前後の文脈と、接続のルールで見極める。

文脈: 「別るとも 影【 】とまるものならば」
(お別れしても、せめてあなたの姿【 】残るものであるならば)

用法: 「だに」は最小限の希望(せめて～だけでも)を表す副助詞として、仮定(～ならば)や願望(～ばや・～なん)と共に使われることが多い。

ここは「せめて影だけでも」という文脈なので「だに」が入る。「さえ」は「添加(～までも)」なので、ここでは不適切だ。「影までも残るなら」では文意が通らない。
「だに」と「さえ」の識別は私大の鉄板！

問五 和歌の解釈

正解: 2

「糺(ただす)の神」がポイント！

上の句: 「憂き世をば今ぞ別る」= つらい現世(京の都)と今お別れする。

下の句: 「とどまらむ名をばただすの神にまかせて」= 後に残る私の名前(評判・無実)は、糺の神に任せて。

光源氏は無実の罪(謀反の疑い)を着せられて須磨へ退去する。「糺す(= 真実を明らかにする)」と地名の「糺(の森)」が掛詞になっている。「自分の評価(無実)はいずれ明らかになるだろう」という意図が含まれているため、2が正解！

問六 人物批評(読解)

正解: 2

傍線部③「いと人わろけれ」の主語は、この文章を書いている筆者(無名草子の作者)だ。「人わろし」は「体裁が悪い」「みっともない」という意味。

対象: 紫の上の歌「惜しからぬ命に換へて…」(命と引き換えに別れを止めたい)

評価: 筆者は、この紫の上の歌を「感情が露骨すぎて品がない(みっともない)」と批判している。

したがって、2「直接的で感情的な和歌を詠んだ紫の上は好ましくない」が正解。
筆者は、もっと控えめで情趣のある表現を好んでいる！

問七 対比構造(読解)

正解: 1

なぜ「花散里」が出てきたのか。文脈は「紫の上の歌はみっともない。何の人数にも入らない(身分の低い)花散里だに(でさえ)、～と(控えめに)詠んでいるのに」。

つまり、紫の上を批判するために、比較対象として「身分は低いが歌は優れている花散里」を引き合いに出しているのだ。よって、1「紫の上の歌に対する評価を述べるに際し比較対象として好都合だったから」が正解。

問八 合致しないもの

正解: 2

問六と問七が理解できていれば解ける。

解説: 問六で見た通り、筆者は紫の上の歌を「人わろけれ(みっともない)」と批判している。理由は「感情が露骨すぎるから」だ。しかし、選択肢2は「秘めた哀しみを和歌に託して間接的に伝えようとした紫の上は思慮深い」と書いている。これは筆者の評価(露骨でみっともない)と正反対だ。

よって、2が合致しない。他の選択肢(1、3、4)は本文の記述や「あはれなり」という評価と合致する。

タブ 4

【現代語訳】

(『源氏物語』の「葵」の巻にある)葵の上の死去の際のこともしみじみと趣深い。葬儀の夜、(葵の上の父である左大臣が)悲しみの闇に途方に暮れていらっしゃる様子など、道理としてもっともで、しみじみと感じられる。(光源氏が、喪服の)剣のように角張ったお召し物を着替えるというので、「もし(私、光源氏が)先立っていたならば、(葵の上は喪服を)濃くお染めになっただろうに」などと(光源氏が)思いになって、

「(服喪の規定に)限度があるので、(私の着る)薄墨色の衣は色が浅いが、涙だけは(袖を濡らして、深い)淵を作ることだ」

と(光源氏が)お詠みになる場面。(中略)

また、喪の期間が終わって、君(光源氏)も(左大臣邸を)退出なさり、日頃(葵の上)にお仕えていた女房たちも、それぞれ一時的に散り散りになるということで、めいめいに(女房同士が)別れを惜しむ場面は、たいそうしみじみとしている。また、(亡き葵の上が)お書きになった手習いの数々を、大臣(左大臣)がご覧になって、お泣きになるなどするのも、すべてがしみじみと趣深い巻である。

(「須磨」の巻の)須磨への退去による別れの際のことについても(同様に趣深い)。(光源氏が)葵の上の実家(左大臣邸)へお別れの挨拶にいらっしゃって、

「(火葬場の)鳥辺山で燃えた煙も(この塩焼きの煙に)入り混じっているのだろうか。(亡き葵の上を恋い慕って)海人が塩を焼くという、その浦(＝恨み)を見に(私は須磨へ)行くのだなあ」

と(和歌が)ある場面。また、(光源氏が)鏡台でほつれ髪を整えなさるので(鏡を)ご覧になると、「たいそう顔が痩せている(自分の)姿が、我ながら美しいのもあはれに(＝しみじみと素敵だ)と思われて」、「この(鏡に映った)姿のように痩せてしまいました」と(光源氏が)言って、

「我が身はこのように(須磨へと)さまよい出たとしても、あなたのそばを離れない鏡の影(＝私の面影)は、決して離れないでしょう」

と(光源氏が紫の上に)申し上げなされると、紫の上は、涙を(目に)いっぱい浮かべて、(鏡の方を)見やって、

「たとえお別れしても、面影が(鏡に)残るものであるならば、鏡を見てでも自らを慰めましょうに(実際には面影は残りませんので、慰めようもありません)」

と(和歌が)ある場面。また、賀茂の下の方の神社のあたりで、(光源氏が)神にお別れのご挨拶をなさるので、

「つらい現世と今こそ別れることだ。(後に)残るであろうわが名(＝無実の評判)を、糺(ただす)の森の神に任せて」

と(和歌が)ある場面。また、(光源氏が京を)出発なさる明け方、紫の上が、

「惜しくもない命と引き換えにして、目の前の(あなたとの)お別れを少しの間でもとどめたいものです」

とおっしゃっているのは、(筆者の私から見ると)たいそう体裁が悪くみっともない。(紫の上と比べて)なんの人数にも入らない(=ものの数ではない身分の低い)花散里でさえ、

「月の光(=光源氏)が宿っている(私の)袖は狭い(=身分が低い)けれども、とどめても見たいものです、見飽きることのない光(=あなた)を」

と(光源氏に)申し上げなさっているようであるのに。

タブ 5

練習問題

【問題編】

問一(文法)

次の文章の①と②の組み合わせによって表される意味として、最も適切なものを選び。
「世の中にたえて桜のなかり①(せば)、春の心はのどけから②(まし)」

過去の事実と、それに基づく推量(～だったので、...だっただろう)

実際とは異なる仮定と、その結果の推量(もし～だったとしたら、...だろうに)

強い意志と、未来への展望(必ず～して、...しよう)

原因と、当然の結果(～だから、当然...だ)

問二(助詞) 次の文章の①(だに)の意味として、最も適切なものを選び。

「散りぬとも香を①(だに)残せ梅の花」

～さえ(添加・類推)

～だけでも(最小限の希望)

～ほど(程度)

～だから(理由)

問三(単語)

次の文章A・Bにおける①・②(影)の意味の組み合わせとして、最も適切なものを選び。

A「月の①(影)、清らにて」 B「鏡に映れる②(影)」

①光 ②姿

①姿 ②光

①暗闇 ②魂

①光 ②暗闇

問四(敬語: 聞こゆ) 次の文章の①(聞こゆ)の意味として、最も適切なものを選び。

「帝に、かやうの由を①(聞こゆ)。」

お聞きになる(尊敬語)

聞こえてくる(自発)

評判になる(一般動詞)

申し上げる(謙譲語)

問五(和歌: 修辞法) 次の和歌の①(ながめ)について、掛け言葉として用いられている二つの意味の組み合わせとして、最も適切なものを選び。「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふる①(ながめ)せしまに」

長雨・眺め(物思い)

眺望・誉め言葉

嘆き・涙

永き日・願い

【練習問題の解説】

問一

正解:2

解説:「～せば……まし」は、「ましかば……まし」と同様に、反実仮定の定型句。「実際には桜があるから、心は穏やかではない(散るのを惜しんでいる)」という現実を裏返して表現している。選択肢1のような「過去の事実」ではない点に注意。

問二

正解:2

解説: 副助詞「だに」の識別。直後に「残せ」という命令形(意志・願望・仮定を含む表現)が来ているため、「類推(さえ)」ではなく「最小限の希望(せめて～だけでも)」となる。「梅の花よ、散ってしまっても、せめて香りだけでも残しておくれ」という文脈

問三

正解:1

解説: 古文単語「影」の基本イメージだ。

空にあるもの(月・日・星)の影 = 光

鏡や水に映った影 = 姿・形 現代語の「影(shadow)」に引きずられるな！
月ときたら「光」、鏡ときたら「姿」と即応！

問四

正解:4

解説:「聞こゆ」は、本動詞で使われる場合、9割方「言ふ」の謙譲語(申し上げる)！
文脈的にも「帝(目上の人)」に「由(詳細)」を伝えている場面なので、謙譲語が適切。1の「お聞きになる」は「聞こし召す」。2の「聞こえてくる」は「聞こゆ」にもある意味だが、対象(帝に)がある場合は謙譲語が優先される。

問五

正解:1

解説: 和歌の鉄板知識。「ながめ」ときたら、「長雨」(雨が降り続くこと)と、「眺め」(ぼんやり物思いにふけて見ること)の掛詞。直前の「ふる」も、「(雨が)降る」と「(時を)経る」の掛詞になっている。←頻出！